

論文の書き方

出題に正対する

一番大切なことは出題に正対することである。つまり「聞かれたこと」に、しっかりと答える事である。典型問題であると説例問題であるとを問わない。

易しいことのようにだが、これが意外に難しい。出題に正対することに成功すれば、論文試験では八分通り合格と考えて良い。それほど出題に正対することは大切なのである。

過去問に当たり、現代の高校生に対して、大人の世代が何を問うてくる可能性があるか、じっくりと考え、自分が出題者になった積もりで「仮定出題」を30問ほど作ってみると良い。似たようなものを除去していけば、出題範囲は意外に限定されてくるものだ。自分なりに30の出題を想定することは割合難しいものである。

論文展開の構想を練る

論文執筆に先立ち、十分に構想を練らなくてはならない。字の巧拙は、立派であるに越した事はないが、それは論文の合否にほとんど影響しない。一通りの漢字を使用してあれば、この点で落第扱いされることはない。但し漢字を適切に用いず、ひらがなばかりを多用すれば、多少減点の対象となることはある。必要な漢字はしっかりと用いることだ。

繰り返すが、構想を充分練ることは極めて大切である。闘志がなければ構想に時間をかけることはできない。弱気な人ほど、深く考えずに筆を起しがちである。「待て暫し」と、はやる心を抑えて十分に構想を練る事だ。構想も立っていないのに筆を起すことは敗北に直結する。

私は60分の持ち時間のうち、25分は構想を練ったものである。もっとも私の場合は筆速が速いからこうしたが、一般には構想に当てられる時間は三分の一程度が適切であるかも知れない。

起承転結

この事は、余り気にしない方がよい。しかし念のため説明すると、「起」では、自分が、その設題をどう受け止めたか、それに対し、どのように見解開陳するかを簡潔に纏めることだ。

「承」は本格的に見解を開陳することになる。ここは主戦場だと考えて良い。

「転」は、設題を忘れてはいないが、自説を主張する上で有利になるような、一応設題を離れた分野から論ずることである。この事が、自説の戻って論ずるときの足下を固めることにつながる。

「結」は言うまでもなく結論である。簡潔に纏めることだ。

佐久間象山が次のような狂歌を詠んでいる。起承転結の極意を簡潔に纏めたものである。

京の三条の糸谷の娘

妹十六 姉二十

諸国大名は弓矢で殺し

糸谷の娘は 目で殺す

その他注意すべき事

名文とは「短い文」だと理解して欲しい。我ながら悪文だと思うときには、それを三つか四つの短い文章に分けて表現することだ。日本一の文章家は夏目漱石かも知れぬが、例えば「草枕」を読んでみると良い。美事に短い文章の連続だ。三島由紀夫、川端康成、すべてそうである。「潮騒」「雪国」は短い作品だから、疲れたときに目を通して見てはどうか。

論述の一、二箇所、君自身の生活観、具体的な生き様を加えると良い。例えば高齢化問題を論ずるとしよう。「私の父は元気である。この父もやがて老境を迎えるのかと思えば少し淋しい。しかし幼い頃、疲れていてもキャッチボールの相手をしてくれた父だ。今度は私が、しっかりと支えてやりたいと思う」などと、生活感、息づかい、君自身の個性をちりばめることが大切なのだ。それも、ごく簡潔にである。

迫力のある文章には二つの要件がある。

ひとつは言葉に無駄がない事だ。もう一つは論述に一貫性があることだ。むだを省く上で大切なのは、練習を重ねることだ。次第に無駄な事を書かなくなる。

論述の一貫性とは「起承転結」とも関わりがあるが、ひとつの論述をしたら、その上に立って、それを拠り所にして次の論述を進める事だ。ひとつの論述の上に立って、これを拠り所として次の論述に進む。ひと言で言えば、文章に論理的発展性がある事だ。言葉に無駄がなく、文書に論理的発展性があるという事、これが迫力ある論文執筆の秘訣である。

日記 手紙を書く習慣をつける

日記は人間に心の安定をもたらす。手紙は、読む相手がはっきりしているから非常に考えを纏めやすい。この二つを君の生活に習慣化すると良い。

平素から日記や手紙を書く習慣をつけておけば、文章を操り悩むような事がなくなる。

論文は自己採点せよ

教師に見て貰えれば一番良いが、教師も忙しい。何よりも有効なのは、君自身が書いた論文を読み返し、自己評価してみることだ。他人に見て貰うより、この方が遙かに良い。私自身は少年時代、弁論大会の原稿を読み直し、訂正し、五回は書き直したものである。私の筆速の早さは、この訓練に負う所が大きい。

多摩湖畔の木々は色づき始めている。秋は足音を忍ばせて近づいている。読書の秋、勉学の秋だ。健闘を祈る。

(平成 22 年 8 月 19 日)